

十六面・薬王寺遺跡第31次調査の遺物整理事業

田原本町教育委員会事務局文化財保存課
清水 琢哉

1. はじめに

平成25年度に実施した十六面・薬王寺遺跡第31次調査では、出土遺物量が300箱ちかくに及んだため、その洗浄作業に平成28年1月までの期間を要した。このため、昨年刊行した『田原本町文化財調査年報23』では遺構の報告をおこない、本年報では出土遺物の報告をおこなうことにした。ただし、本調査で出土した遺物は極めて多く、本報告は遺跡の変遷と性格を考える上で重要と思われる遺構と遺物を中心に紹介することとした。

2. 弥生時代前期～中期初頭の出土遺物

調査区北西部を中心に弥生時代前期～中期初頭の遺物が出土している。第2図-1は、S X-201の小土坑から横転した状態で出土した大和第I-1-a様式の壺である。第2図-2・3はSD-201から出土した大和第II-1-b様式の壺である。

このほか、石棒・流紋岩製石庖丁・結晶片岩製石庖丁などの破片（第17図-1～4）が弥生時代末～古墳時代の遺構や包含層から出土した。

3. 古墳時代初頭の方形周溝墓と出土遺物

本調査では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の方形周溝墓5基を検出した。このうち、出土遺物が最も充実していた1号墓を中心に報告する。

1号墓の主丘部は1辺9.5m前後で、幅2.3m前後、深さ0.3～0.5mの周濠が四方を囲む（第3図）。特に東側周濠が深く、最も多く土器が集中し、北西隅付近は僅少であった（第4図）。

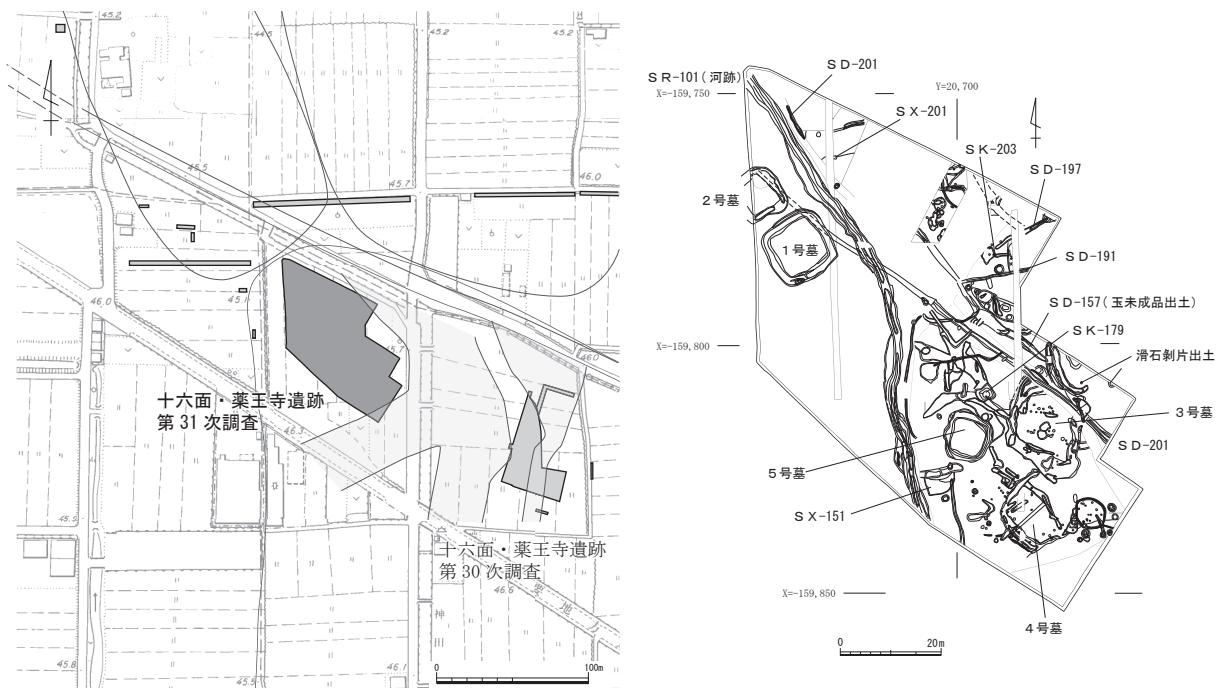
第5・6図は1号墓から出土した土器である。小形丸底壺や小形器台が出土しているほか、庄内形甕（第6図-17）と肩に波状文を施す布留系の甕（第6図-18）が共伴する。また、搬入土器としては、山陰地方の台付無頸壺（第6図-19）、山陰系の二重口縁壺（第6図-21）、胎土に結晶片岩を多く含む紀伊産の壺（第6図-20）、近江～伊勢湾岸周辺からの搬入とみられる外面タテハケ・内面ナデ仕上げの甕（第6図-22）がある。これらの遺物は、布留0式に位置づけられる。

第7図-1～3は、調査区北東部で検出した井戸SK-205下層の土器である。いずれもほぼ完形で出土した。布留1式に位置づけられる。

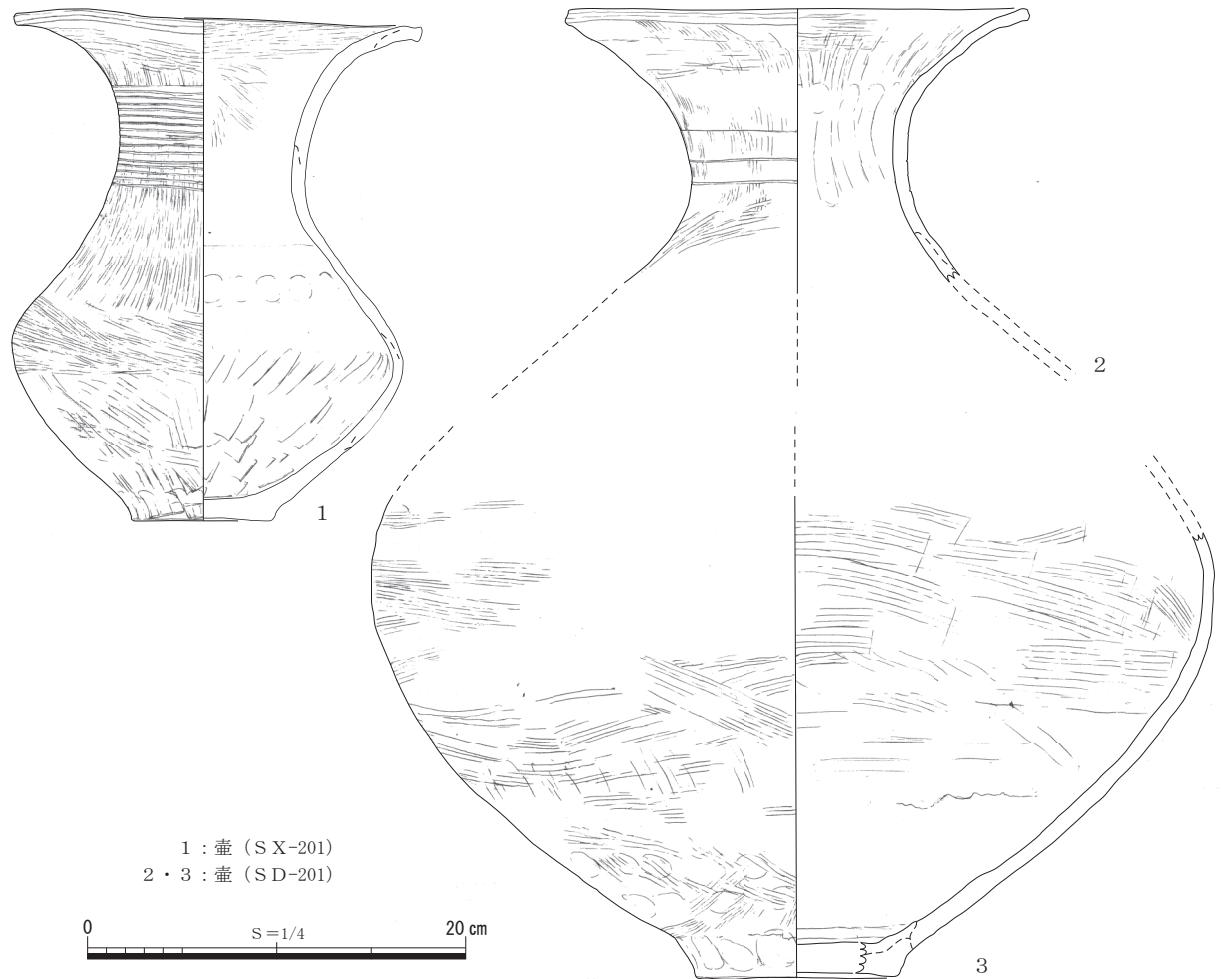
第8図-1は加飾器台で、大和第VI-4様式頃の甕数点とともにSD-191から出土した。第8図-2～4は3号墓周濠から出土した壺である。第8図-4は、籠目の残る鉢である。

第9図は、調査区北東端で検出した北東方向の溝SD-197から出土した土器である。須恵器は出土していないが、布留3式の様相を呈する。碧玉製勾玉未成品（第17図-7）がSR-104最下層から出土しているが、SD-197を切っており、本遺物はこの遺構に伴っていた可能性がある。

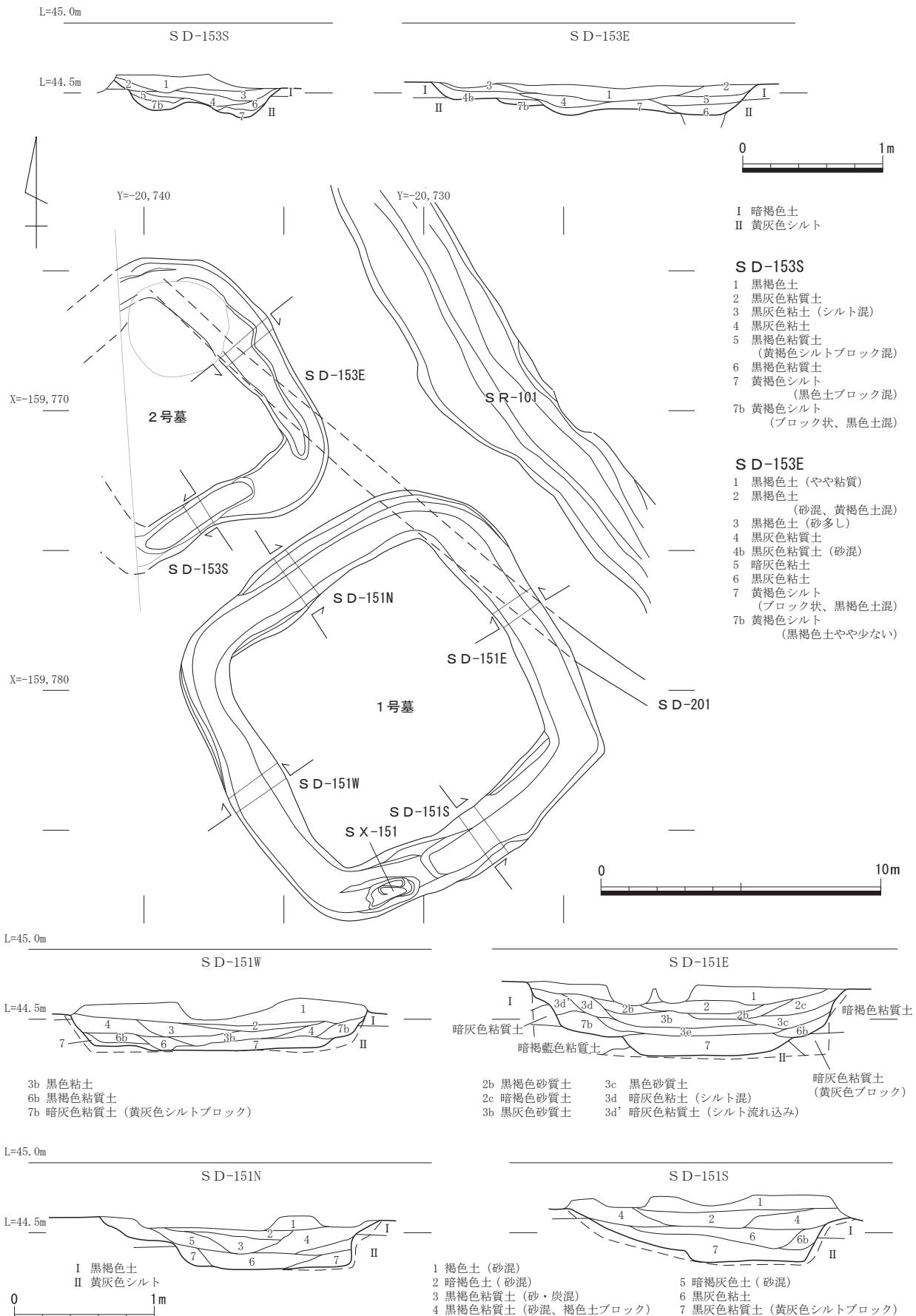
第10図は、調査区中央付近で検出したSK-179とその遺物である。長軸4m、短軸2.5m、深さ



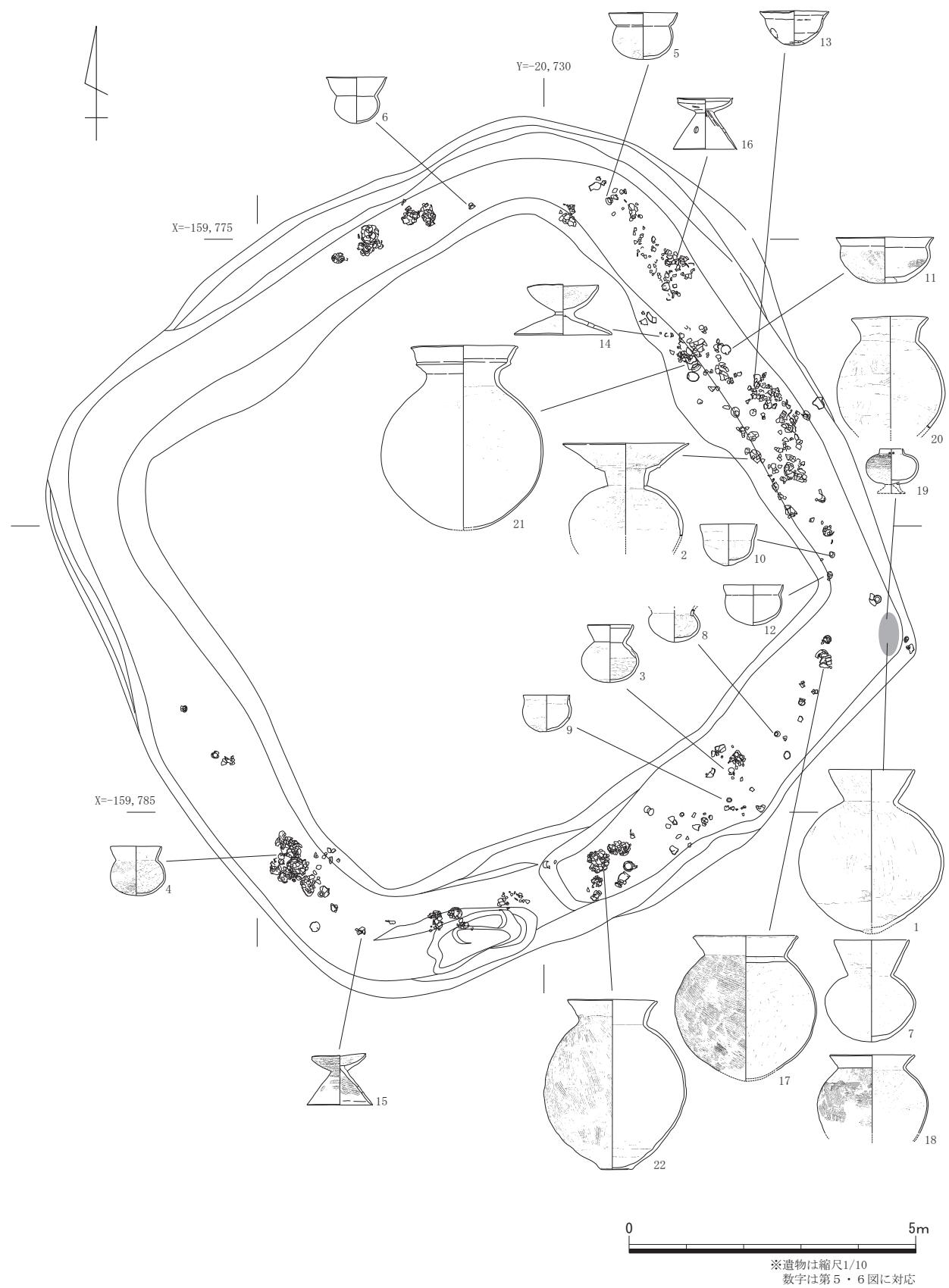
第1図 調査地の位置（左：S = 1/5,000）と弥生時代～古墳時代中期の遺構（右：S = 1/1,500）



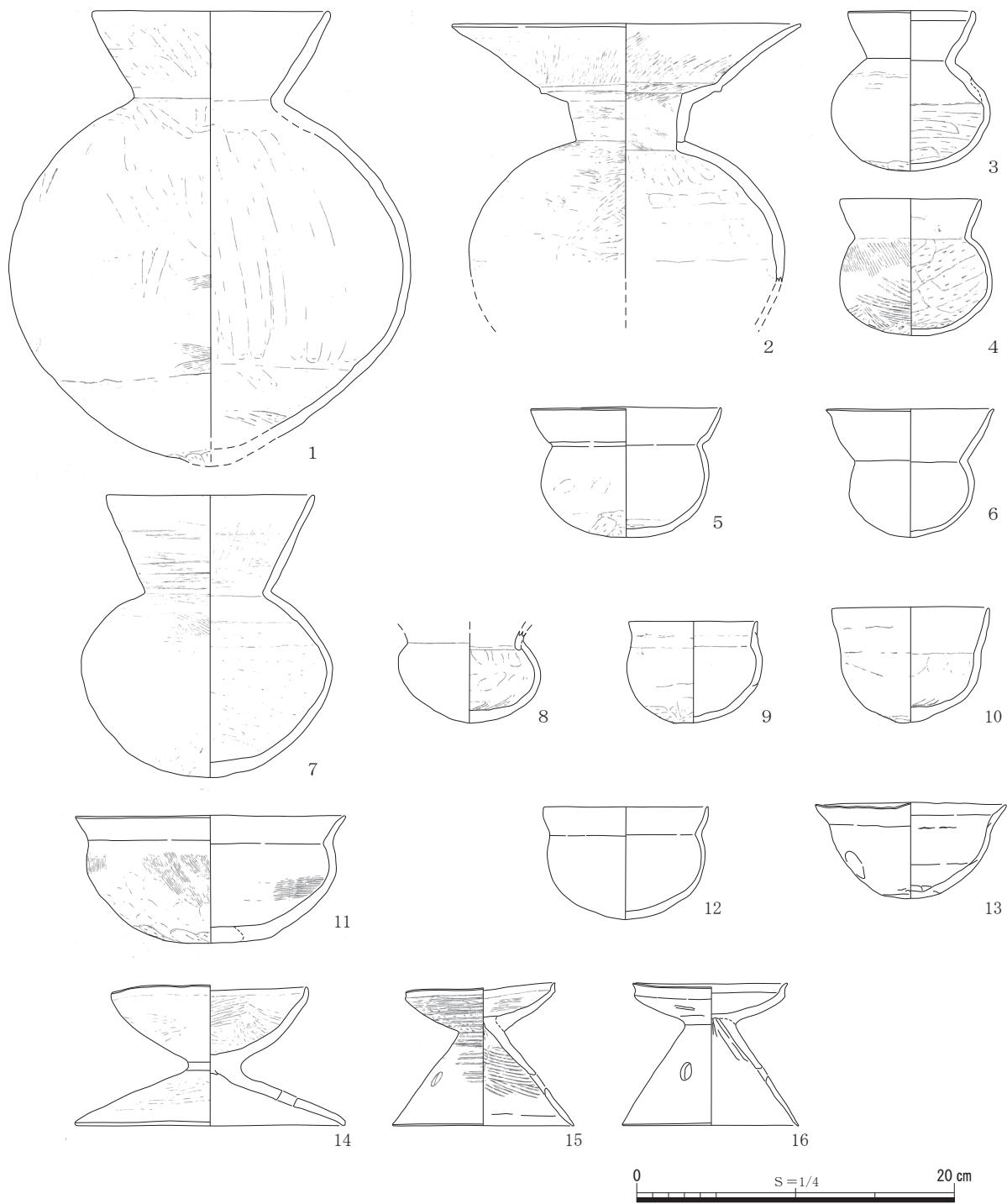
第2図 弥生時代前期～中期初頭の土器



第3図 1・2号墓平面図 (S=1/200) よび周溝断面図 (S=1/40)

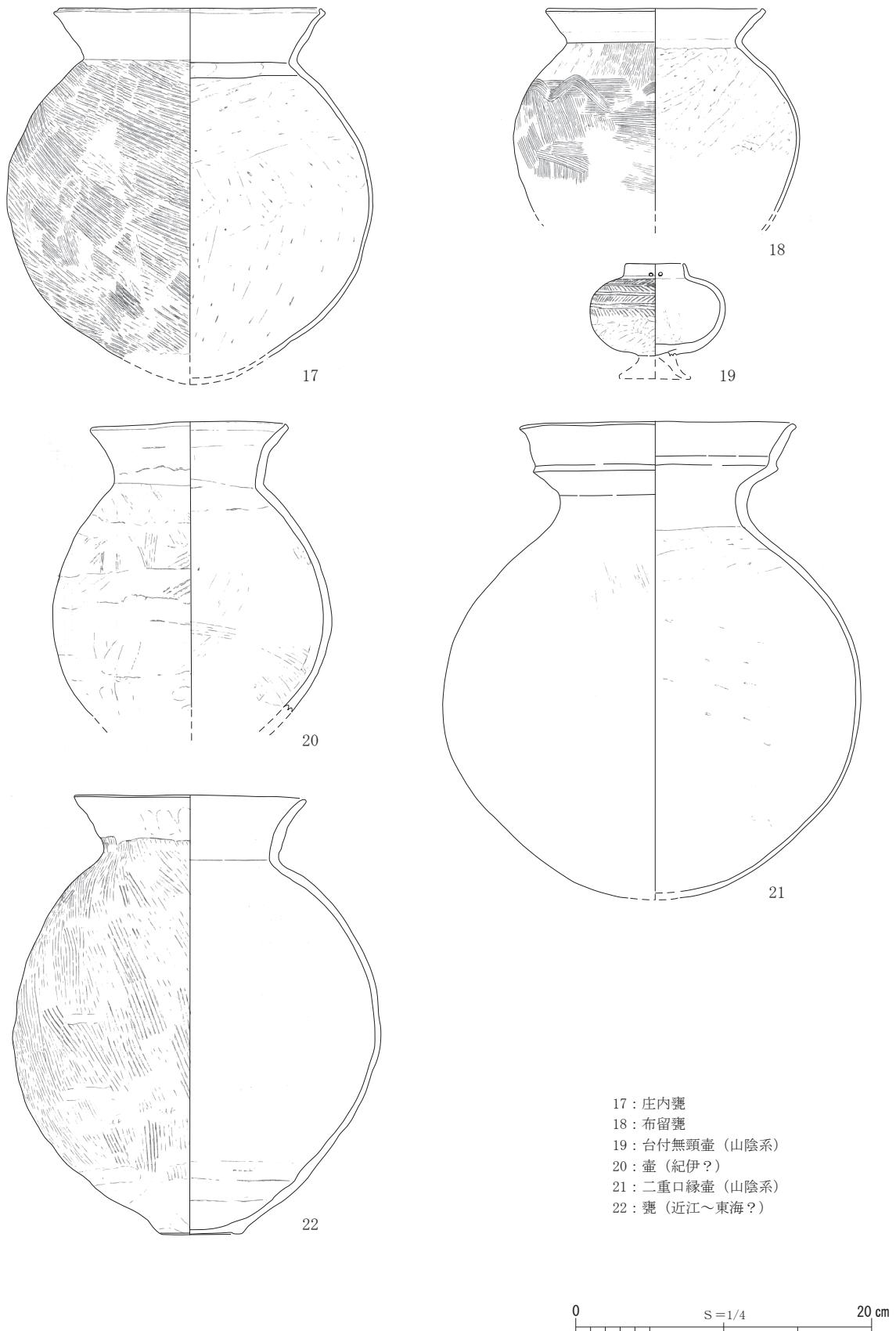


第4図 1号墓出土状況 (S=1/100)

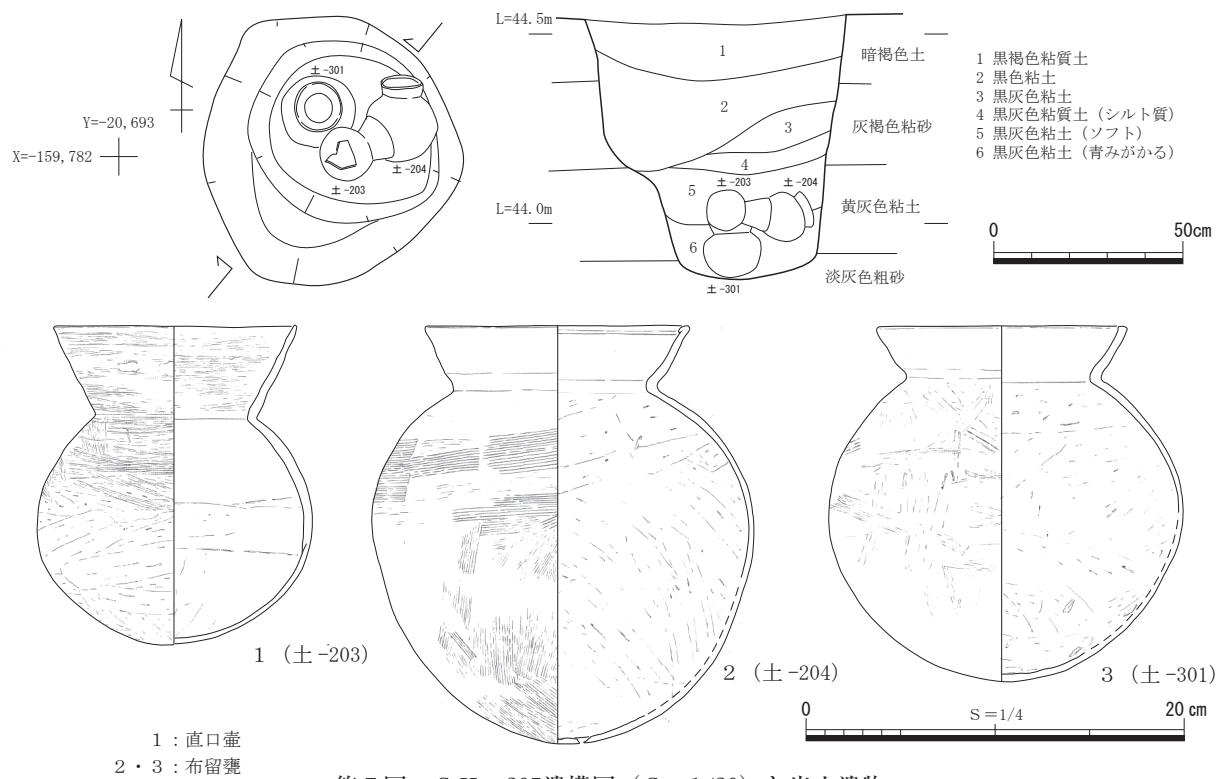


- 1・7：直口壺
- 2：二重口縁壺
- 3～6：
- 8～10：小形丸底壺
- 11～13：鉢
- 14：高環
- 15・16：小形器台

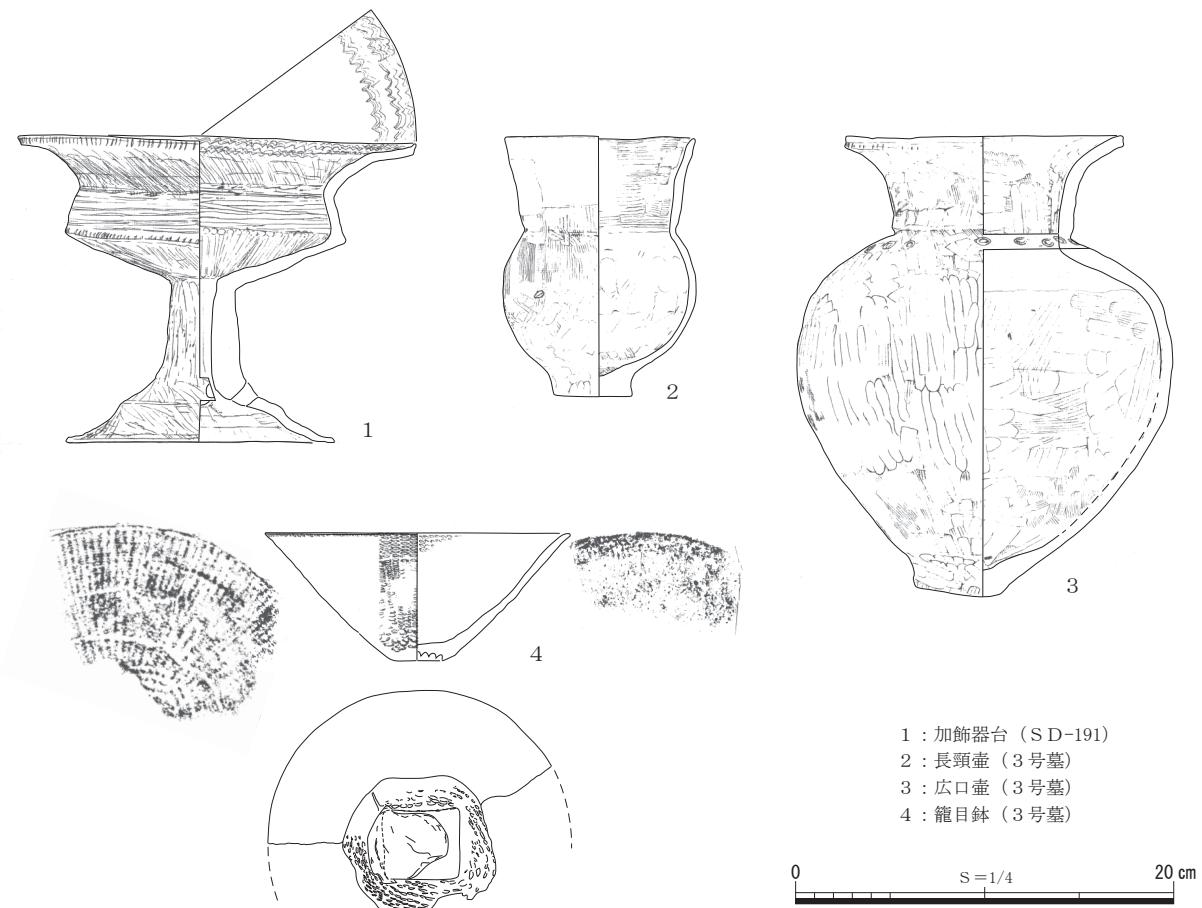
第5図 SD-151出土土器1



第6図 SD-151出土土器2



第7図 SK-205遺構図 ($S = 1/20$) と出土遺物



第8図 その他の弥生時代遺構の出土遺物

0.8mの大形の井戸で、中層を中心に多数の土器が出土した。このうち第3層出土の土器2点を図示する。第10図-1は複合口縁の壺で、四国系の影響を受けている。第10図-2は布留甕で、肩部に刺突文を施す。いずれも布留2・3式の様相を示す。なお、グリーンタフ片1点がこの井戸内から出土しており、本遺跡での玉製作時期を考える上で重要である。

このほか、4号墓直上の中世小溝から出土した銅鏃(第17図-9)、布留1式の豊穴住居状の遺構から出土した鉄斧(第17図-11)、布留3・4式の土坑SK-191から出土した又鍬・紡錘車(第18図-1・2)、井戸SK-174から出土した掛矢状木製品(第18図-3)を図示する。

4. 古墳時代後期の大溝と出土遺物

第11図-1~12は須恵器で、1~9がSD-101、10~12がSD-101と交差する河跡SR-103から出土した。このほか、SD-106下層から滑石製の鏡形石製品2点(第17図-5・6)が、SD-101上層から銅鏡1点(第17図-12)が出土した。

5. 古代の遺構と遺物

平安時代の地鎮遺構と井戸、鎌倉時代の土坑などを検出した。SK-10は調査区中央北で検出した地鎮遺構で、土師皿6点(第13図)とさし錢の状態で癒着した銅錢12枚が出土している。銅錢については、奈良文化財研究所のご協力でCTスキャン画像を撮影していただいた結果、大半の銘を判読することができた(第14図)。890年初鑄の寛平大寶が含まれることから、9世紀末~10世紀初頭頃の年代となる可能性が考えられる。

SK-17は、直径2m、深さ1.6mの井戸で、中層から土師皿多数・黒色土器1点、下層から黒色土器1点が出土した(第15図)。供献土器の可能性がある。

SK-16は方形プランの浅い土坑で、下駄と土師皿・甕等が出土した(第16図-1~3)。

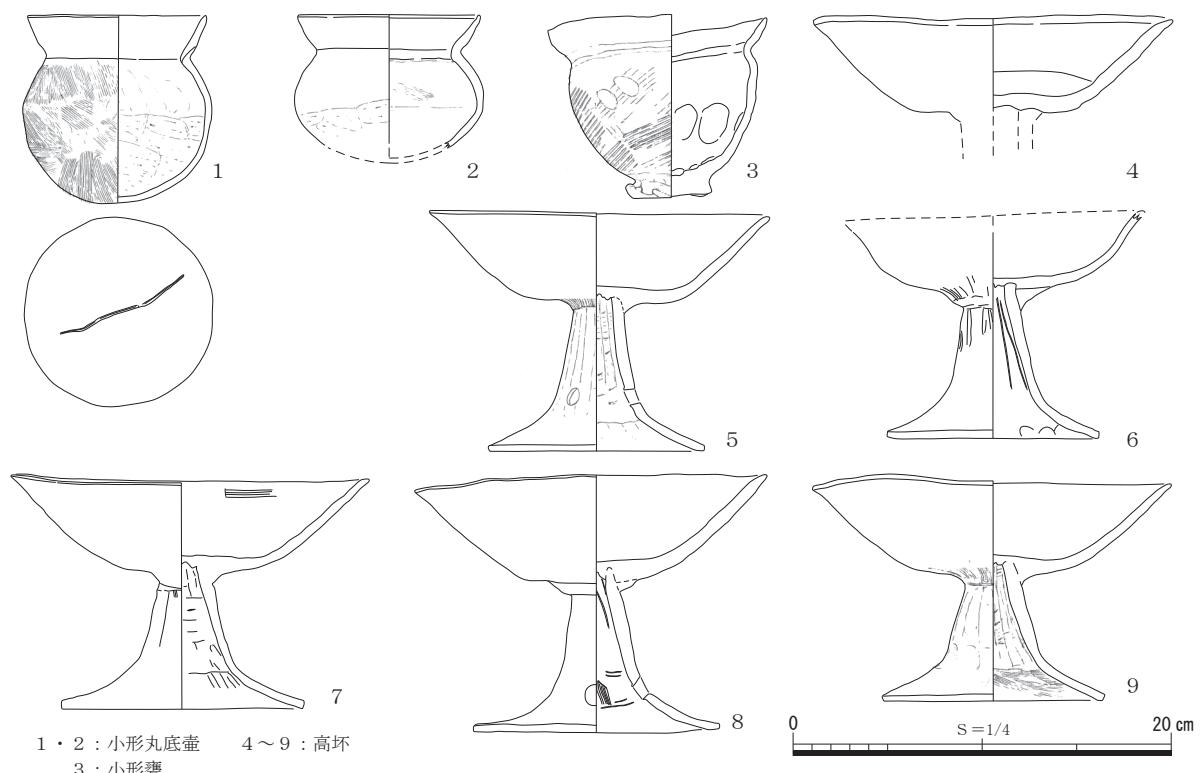
SX-51は、調査地北端で検出した長方形の遺構で、北側に隣接する河川に直接繋がる溜め池のような性格が想定される。瓦器塊等が出土した(第16図-4~8)。

6. まとめ

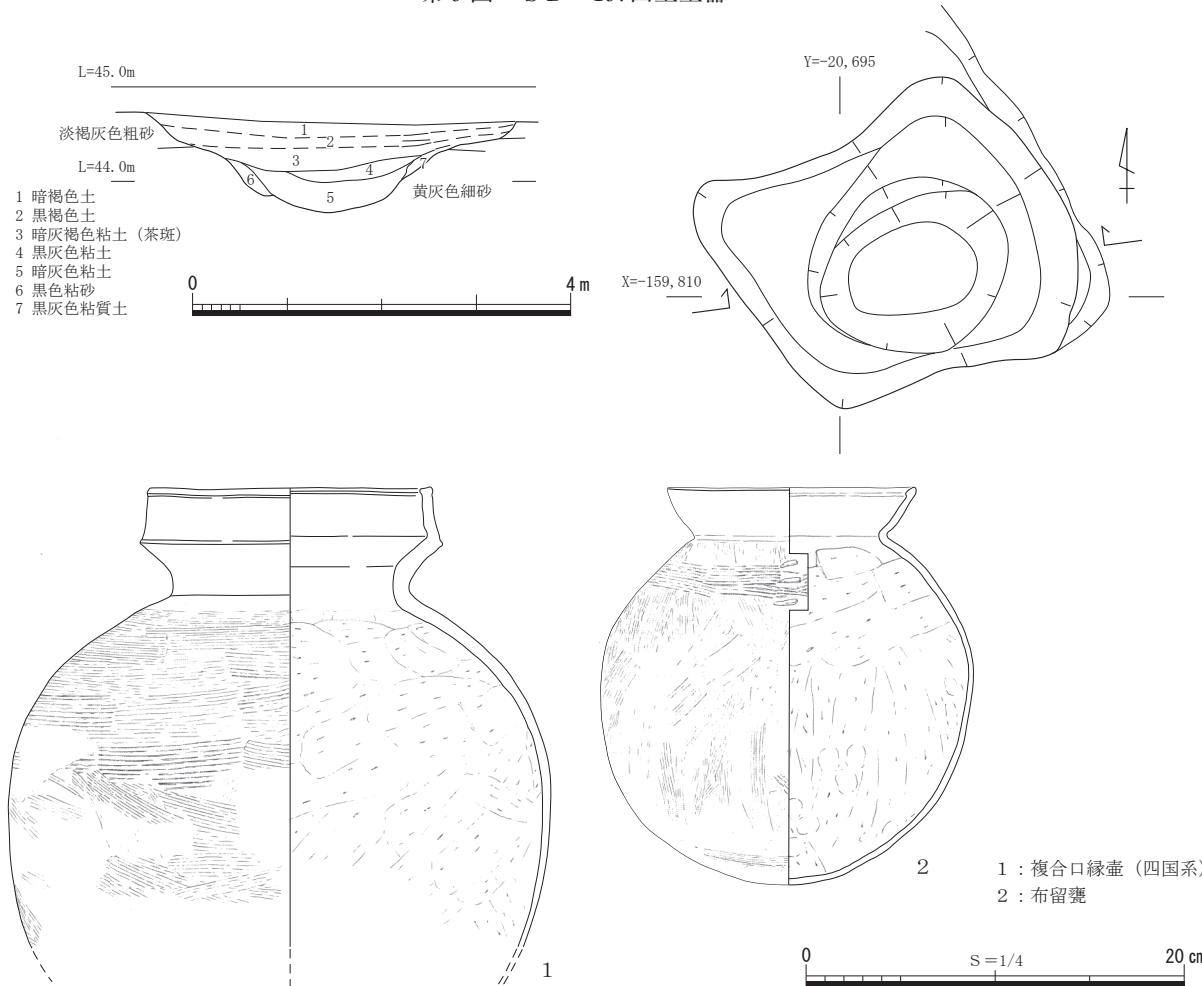
今回報告した資料は、重要な遺構・遺物に絞って整理作業をおこなったものの、滑石・グリーンタフを素材とする玉製作関連遺物については後日再整理をおこなうことを期して勾玉未製品のみ報告した。

なお、銅錢のCTスキャン画像・X線画像は独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所から提供していただきました。

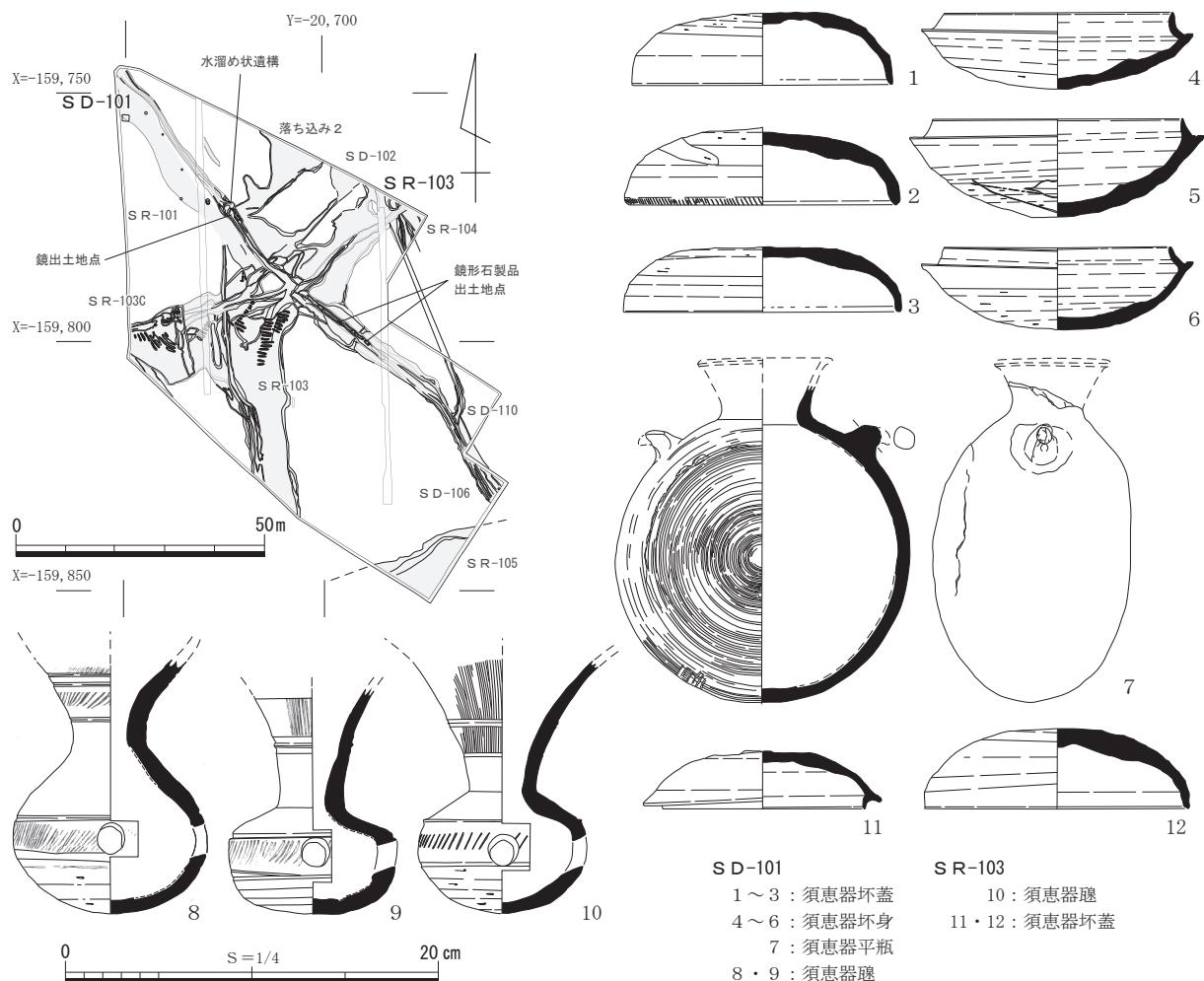
末筆ながら、実測作業にあたられた松笠千恵子氏・江浦至希子氏、銅錢と古代の土師器の分析に多大なるご協力をいただいた松村恵司氏・小池伸彦氏・高妻洋成氏・尾野善裕氏・神野恵氏(独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所)・三好美穂氏(奈良市教育委員会)、玉未成品についてご教示をいただいた廣瀬時習氏(大阪府近つ飛鳥博物館)、古式土師器についてご教示をいただいた青木勘時氏(上牧町教育委員会)をはじめとする皆様に深く感謝いたします。



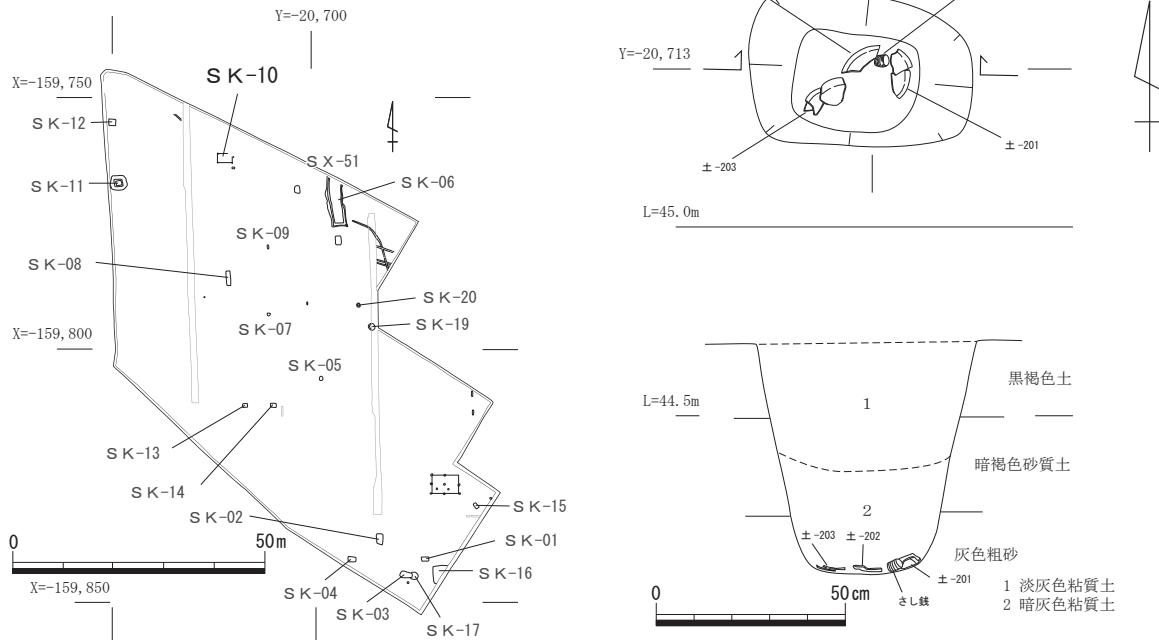
第9図 SD-197出土土器



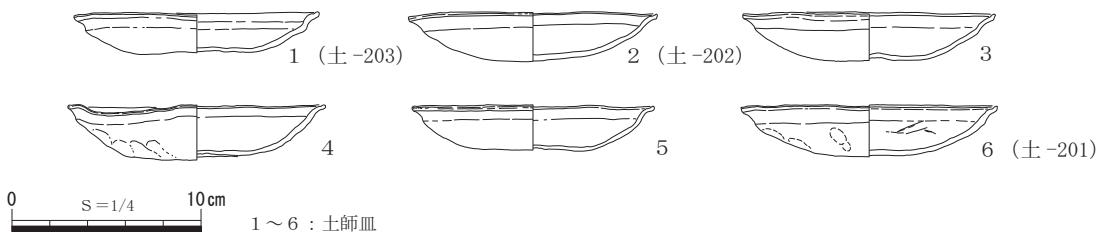
第10図 SK-179 遺構図 ($S = 1/80$) と出土土器



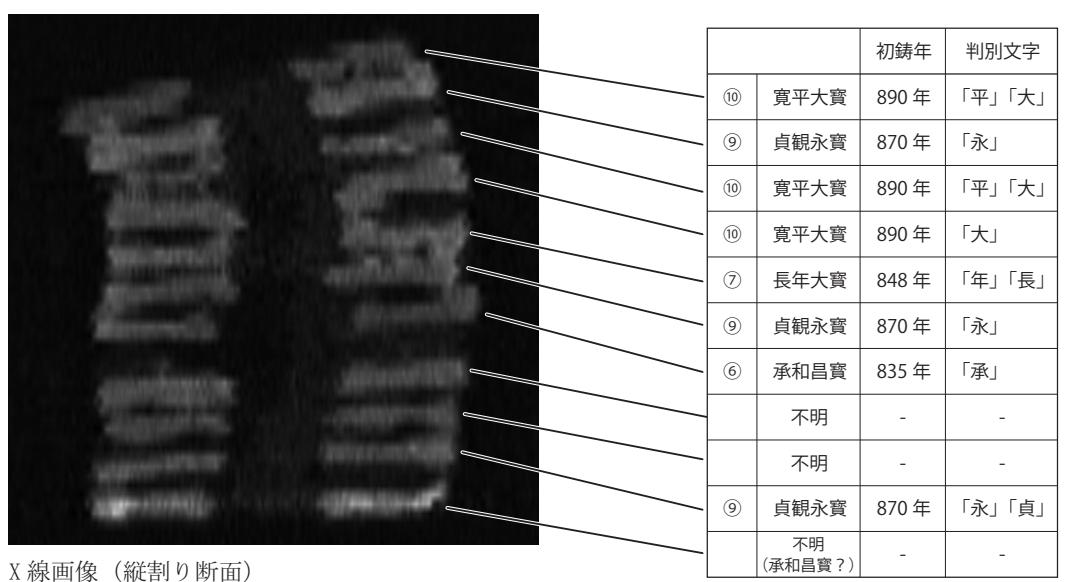
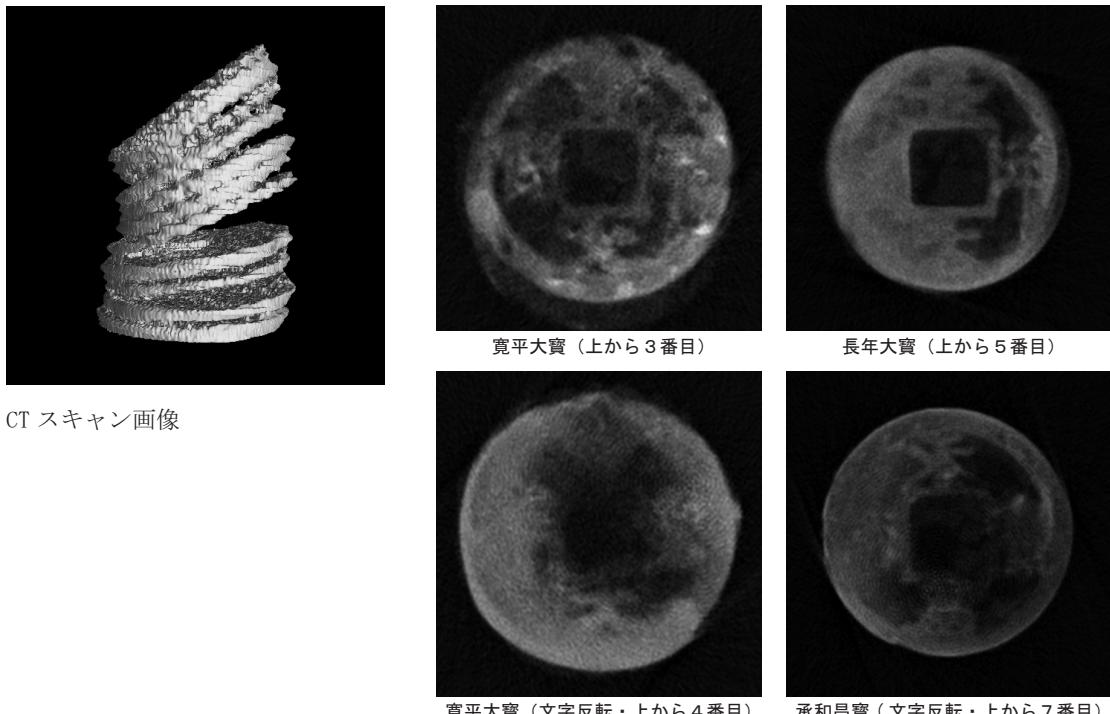
第11図 古墳時代中・後期の遺構 ($S = 1/1,500$) と S D-101・S R-103出土須恵器



第12図 地鎮遺構 S K-10 遺構図 (左: $S = 1/1,500$ 、右: $S = 1/20$)

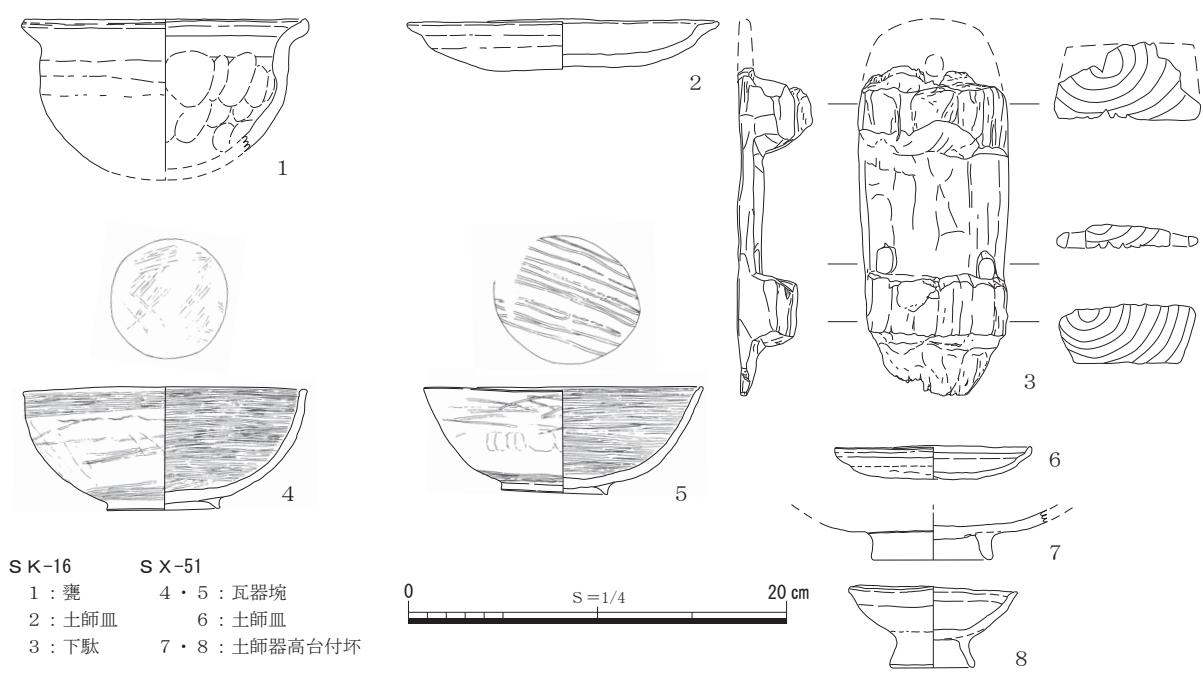
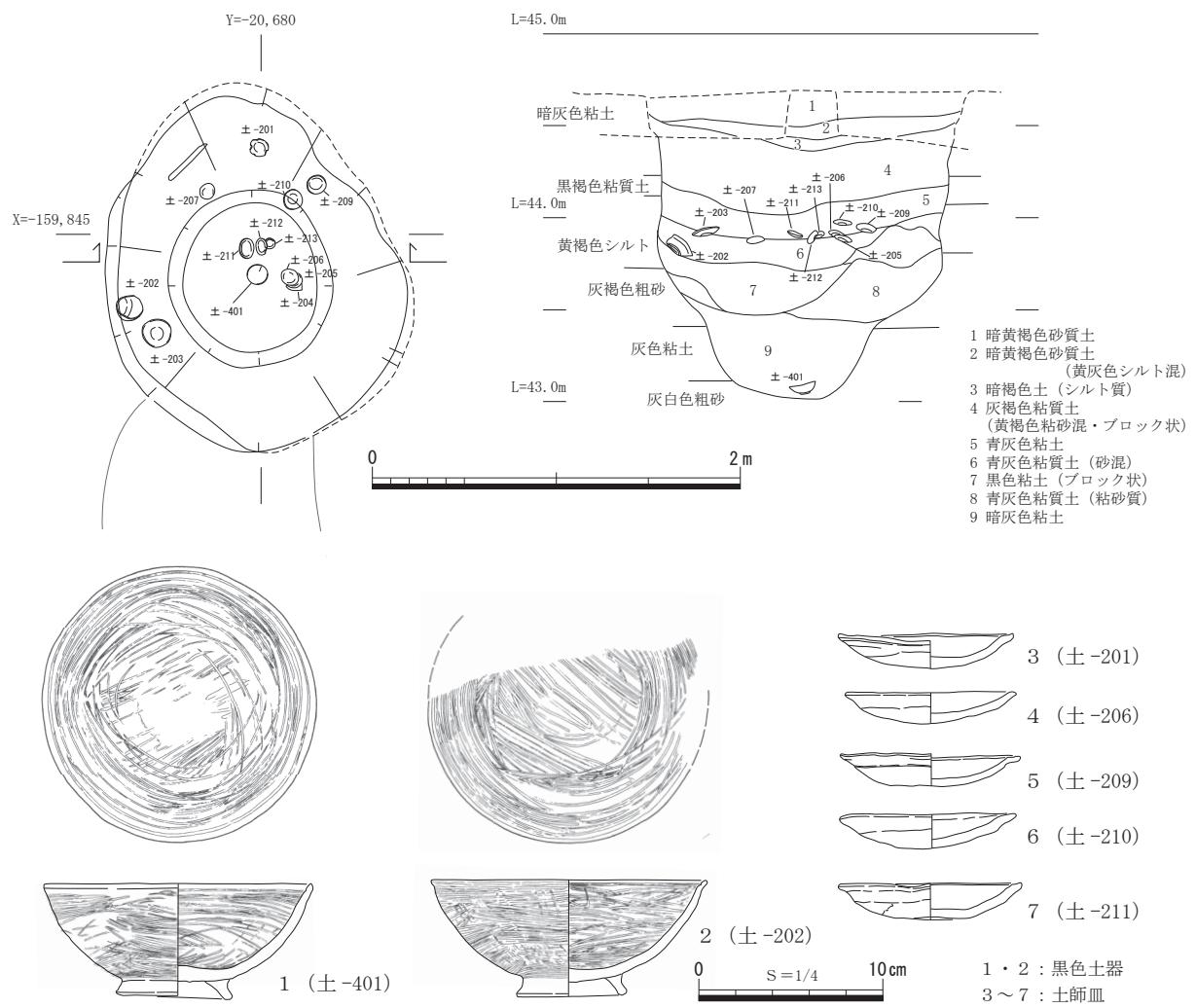


第13図 SK-10出土土師器



※奈良文化財研究所での CT スキャン画像による判読結果（一部推定）
写真提供：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

第14図 SK-10出土さし銭 CTスキャン・X線画像



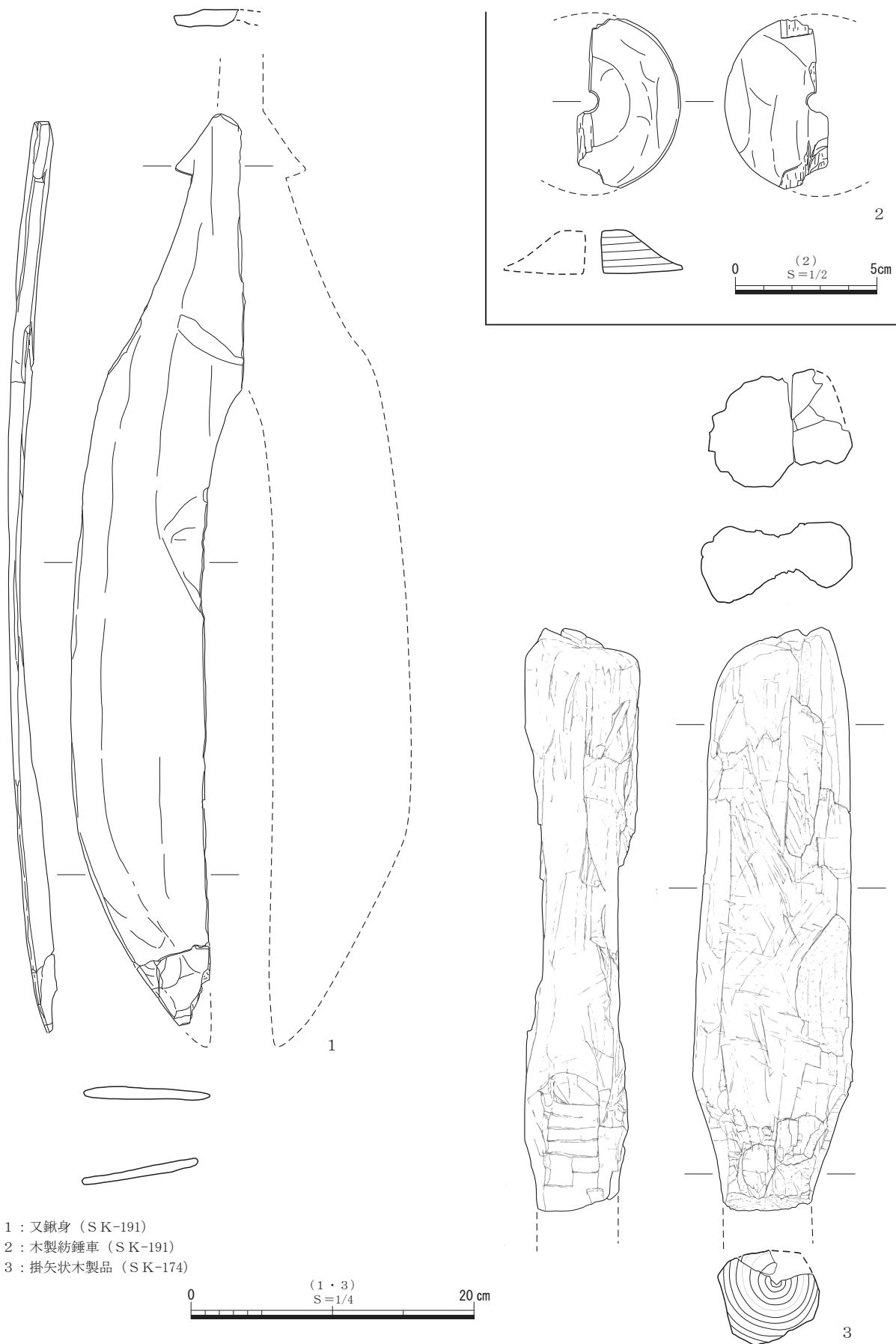


1 : 石棒 (S R-101)
2 : 流紋岩製石庖丁 (S R-101)
3 : 結晶片岩製石庖丁 (S D-106)
4 : 磨石 (2号墓)

5・6 : 滑石製鏡形石製品 (S D-106)
7 : 碧玉製勾玉未成品 (S R-104)
8 : グリーンタフ製勾玉未成品 (S R-103)
9 : 銅鏃 (4号墓)

10 : 用途不明鉄製品 (S D-106)
11 : 袋状鉄斧 (S X-101)
12 : 青銅鏡 (S D-101)

第17図 出土石・金属製品



第18図 出土木製品